

三月卅二日 一幕七景

——伯林悲喜劇——

池谷信三郎

初演 昭和二年二月二十五日〜三月六日（於帝國ホテル演藝場）

新劇協會

人

榎祐二郎 （ユーヂと呼ばれる）日本の留學生。

ロツテ 榎と同棲してゐる女。以前は淫賣婦。

フリツツ 女の連れ兒。

ゲルダ ロツテの以前の友達。淫賣婦。

所

伯林

時

一九二三年

舞臺

三階の一室。留學生榎祐二郎の借りてゐる部屋。

窓。開かれた硝子戸の外は露臺になつてゐて、往來を隔て、向ふ側の家並が見える。

苦提樹リンデンの梢が少し覗いてゐる。

室内は相當立派。ピアノ、蓄音機、タイプライター、卓子、ソファ、スチーム、衣裳箆筒、ケビントランク等。

露臺バルコンの植木鉢。壁にはベツクリンの繪、清長の浮世繪、エジプト更紗、それから大きな曆

—— 29 と出てゐる。

鳩時計。

右手の戸は臺所に通ず。左手の戸は玄関の部屋に通じ、そこよりこのビルディングの出口に行く。

## 夕景

(燈火はまだ点けてない。)

ロツテ、二十五六、痩せぎすな金髪碧眼<sup>ブロンド</sup>。無雑作な束ね髪、餘りお化粧をしてゐない。白の毛のスエーターを着て、編物をしてゐる。

ゲルダ、二十歳前後、丸ぼちやの愛嬌ある顔。鳶毛。緑色の派手な外出着、黒い縁廣の帽子。厚化粧、眞赤な唇。しかし、どこか憔悴の陰影を秘めてゐる。

陽氣な舞踏曲(「マダム・ポンパドウル」ピアノトリオ。)にて幕開く。(隣りの家より聞こえて来る音楽。)

## 第一景

ロツテ (編物をし乍ら) ほんとに暫くだつたね。

ゲルダ (黙つてゐる。)

ロツテ もうかれこれ一年になるか知ら。

ゲルダ 永いこの伯林の冬も、もうぢきお終ひだわね。

ロツテ あゝ。

(短き間。)

菩提樹リンデンの若葉が、もう直ぐ色づいて来る。さうすると街が明るく光り出す。

(間。)

煙草どう？ (編物の手を止めて、自分も一本点ける)

ゲルダ (一本点け乍ら) 良い煙草だね。

ロツテ 灰皿。(渡す)

ゲルダ (燐寸の燃えさしを捨てる)

ロツテ 燐寸つてば、ほんとにあの頃の事を想ひ出すよ。夜晩く歸つて来て、そをつとあの暗い階段を上つて行つた時さ。丁度三本で家迄行けたつけね。三本目の、……

ゲルダ ロツテ!

ロツテ 燐寸が消えかける時、狼狽て、鍵穴へ鍵をさしこんだつけ。何?……ゲルダ!  
ゲルダ え?

ロツテ 今話しかけただらう？

ゲルダ あゝ。あたゝい、昨日ハレンゼーへ行つたのよ。雪解ゆきげの水が、まだ溶け切らない残りの雪を浮べて、ちよろちよろと流れて行くの。あたゝいほんとに良い心持だったわ。白樺の森から、もう若葉の匂ひがして、春の吐息がほんやり漂つてゐるのよ。

ロツテ もうかれこれ苺酒が出やしない？

(短き間。音楽止む。)

ゲルダ フリツツは？

ロツテ 今ユーヂと一緒に戸外おもてへ行つたよ。もうぢき歸つて来るだらう。

ゲルダ 随分大きくなつたらうね。

ロツテ すつかりユーヂに馴染んぢまつてね、パパ、パパつて云ふんだよ。

ゲルダ 先は弱さうな兒だったが。

ロツテ それに日本語の唱歌を覚えてね。

ゲルダ さう？

ロツテ 毎日肉を食べるんだもの、太るよ。

ゲルダ 毎日？

ロツテ (氣が着いたやうに) それに、毎日、ユーヂがああやつちや散歩に連れてつてくれるんだらう。廣場の公園が近いもんだから。

ゲルダ 料理は誰がするの?

ロツテ あたいさ。ユーヂはヴィーナーシュニツツエルが好きでね。

ゲルダ シュニツツエル?

ロツテ それから、アイスバイン。

ゲルダ (熱心に) アイスバイン?

ロツテ (笑ひ乍ら) あゝ。だけど時々、日本の副菜おかつを作らされるんで閉口だよ。でも、もう大部馴れちやつたけど。

ゲルダ 日本の料理つてどんな?

ロツテ 醤油おしたじつてもん使ふんだよ。

ゲルダ おいしい?

ロツテ まずいよ。

ゲルダ そんなもん日本から送つて貰ふの?

ロツテ いゝえ、ハンブルヒへ着く船で分けて来て貰ふんだよ。

ゲルダ さう?

(間。)

ロツテは日本へ行く心算つもり？

ロツテ だって來年はユーヂが歸るんだもの。あたゐ無理にだって追ついて行くわ。

ゲルダ 日本つて随分違いんだらう？

ロツテ あゝ。巴里よかもつともつとずつと遠いんだよ。

ゲルダ あたゐも行つて見たいな。

ロツテ 印度やそれからエジプトを越して行くんだもの。あれね、(壁のエジプト更紗を指さして) エジプトのお土産だつて。

ゲルダ 幾日かゝるの？

ロツテ 何處？ 日本？ 二月だつて。

ゲルダ 二月？ まあ――。

ロツテ 日本にはこんな灰色の空はないんだつて。明るく澄み切つた青空の下に、櫻の花が一面に咲いてるんだつて。(段々熱を以つて) 日本？ あたゐすぐにでも行き度いわ。こんな嫌な想ひ出のこびりついた國、一刻も早く離れて了ひ度いわ。……あたゐほんとにまだ見ない童話の國に憧れてるんだよ。

ゲルダ まあ姉さん、随分ハイカラな言葉覺えたのね。それに學者ね、姉さんは。驚いたわ。

ロツテ そりやさうよ。あたいうち知識階級なんだもの。

(間。)

それに人が皆んな親切なんだつてさ。

ゲルダ 日本？

ロツテ あゝ。

ゲルダ さう？

ロツテ 子供が結婚してからも、親がまだ世話焼いてくれるんだつて。

ゲルダ まあ！

ロツテ その代り、親が瑞西チーズが好きだと、子供も、お嫁さんも、孫も、皆んな瑞西チーズを食べなきやいけないんだつて。

ゲルダ 親切過ぎるのね。

ロツテ だけど、あたいうち坐るのだけは閉口よ。ユーヂは西洋館を建てて約束したけど。

(間。)

ゲルダ (自分の家の寒さを想ひ浮べ乍ら、寒さうに) あつたかいわね、この部屋。

ロツテ 蒸氣暖房スチームが通つてるんだもの。石炭といくらも違はないんだよ。それに身體にも良いんだから。

ゲルダ もう春が来るんだわ。……随分寒かつたな。(獨り言のやうに) あの氷室ひむろの中みたいな冬の夜。……

ロツテ (しんみりと) ほんとによく二人で寒い冬の街を歩いたつけね。あたい、あの頃の事を思ふと實際ぞつとするよ。

ゲルダ でも、ロツテ姉さんは幸福だわ。

ロツテ (獨りで饒舌つてゐる) お客が捕まらないでさ。お腹なかのペコ〜に空いた身體を引摺つて、二時頃、あの暗いルイーゼン街の裏町へ歸つて行つた頃の事。

ゲルダ (戸外に目をやり乍ら) この頃はそりや不景氣なのよ。一週に一遍も捕まりやしない。(腕を搔く)

ロツテ (やつぱり獨りで) 燈火あかりの消えた獨逸劇場の前を、よく二人で抱き合ふやうにして歸つて行つたつけね。だつて、さうしないと二人とも倒れて了ふんだものね。

ゲルダ もうすぐロートドルンの、赤い眞紅な花が街を綺麗に色どるんだわ。  
ロツテ まだあすこに居るの？

ゲルダ 家<sup>うち</sup>? あゝ。

ロツテ 小母さん達者?

ゲルダ 相變らずよ。太つちよの上にもいつでも脹れてるんだもの。厭やになつちまふわ。

ロツテ ほんとにね。豚が腎臓病にかゝつたんぢやあるまいし。

ゲルダ お多福風邪よ。でもあれがほんとの豚だつたら、あたいやこんな饑<sup>ひも</sup>しい思ひなんかしないで濟むんだのにね。(想ひ出したやうに胴締を締める)

ロツテ (笑ふ。又編物を取る)

(間。)

(向ひの窓硝子に夕陽が赤く映えてゐる。)

ゲルダ 誰の? フリツツの?

ロツテ あゝ。そろゝあつたかくなるからね。

ゲルダ あたいなんて、これ、(着物をさして)去年のままよ。それに、(靴を脱いで)こんなに穴があいちやつて。靴下だけでも買はなくちやね。絹の薄い、……

ロツテ 靴下は大事な商賣道具だからね。

ゲルダ (熱を持つて)近頃は肉色のそりや良いのが流行つてゐるのよ。(急に元氣なく)だけど、

∴∴

ロツテ この間も、エタムの角店で覗いたけど、随分高いんだね。

ゲルダ とつても手が出せやしないわ。(手に弄んでゐた革の手袋から紙片を出して)こんなもん  
が貯つてちやね。

ロツテ 何さ？

ゲルダ 瓦斯の拂ひ。

ロツテ ユーヂに拂つて貰ふといふよ。あたいが言つて上げようか？

ゲルダ いふのよ、どうにかなるもんだわ。(紙片をしまひ乍ら)さうく、あたいは近い内に警  
察へ行かなくちや。

ロツテ 鑑札？

ゲルダ あゝ。(間。腕を搔く)

ロツテ 南京蟲？

ゲルダ (苦笑して頷く)

ロツテ まだあるの？

ゲルダ まだつて近頃はそりやひどいのよ。

ロツテ そ云つてやりやいふのに。

ゲルダ えゝ、そ云つてやつたのよ。そしたら、あの家主の小母さんの云ひ草がいふわ。これつぽ

ちの家賃で南京蟲を一匹々々鎖に繋いでおいちや、こつちが合ひませんや、ですつてさ。

ハハ、……

ロツテ (笑ふ)

(やゝ長き間。)

ロツテ ゲルダ!

ゲルダ 何あに?

ロツテ あのね。今日何んか食べた?

ゲルダ (力なく) あゝ。

ロツテ 遠慮しなくたつて良いんだよ。何か残つてゐるんだから。

ゲルダ (黙つて下を見てゐる)

ロツテ (毛絲を置いて立上る) 今、何んかさがして来て上げるわ。(右手の戸を開ける)

ゲルダ いゝのよ。ロツテ! もうそろゝ御出勤しなくつちや。

ロツテ まあ、良いぢやないか、宵の口の蝙蝠野郎なんか。(次の間へ入る)

ゲルダ (立上つて、鏡で顔をなほす。唇に紅を塗り、ダンスの身振りで歩き、ぼんやり露臺から戸外を見てゐる)

ロツテ (やがて、皿に腸詰を入れて持つて出て来る。圓卓に乗せる)

ゲルダ (戸外を見たまゝ) まだ日の暮れるのが早いわね。あんなに夕陽ひが赤く向うの窓に光つてゐるわ。

ロツテ 夕暮時つて、何んだか淋しいもんだね、……辛子要る?

ゲルダ いゝわ。……あら、もうゲラニヤが咲いてゐるのね。ほら、あすこの家のバルコンうちに。

ロツテ あつたかいうちにお食べよ。あたいもなんだかお腹なかが空いちやつた。

ゲルダ (すぐ來ようとして、ちよつとためらひ、丁度そこに糸で吊るされた、赤い紙の折鶴を見て、觸り作ら) あら、まあ、面白いもん。なあに、これ? 綺麗だ事。

ロツテ 温室むろ咲きだらう、きつと。……どれ? あゝ、それ? それはね、紙で鶴を慥ざへたんだよ。日本人つて男の癖にほんとに手先が器用だね。

ゲルダ ユーヂが慥へたの。

ロツテ あゝ。フリツツも覚えちやつて、近頃紙さへありや自分で折るんだよ。一マークだの十マークだのもう使へないお札は皆んな鶴になつちまつて、フリツツのお部屋はまるで動物園さ。

ゲルダ さう? (腸詰の方を見てゐる)

ロツテ 食べない? これでもハツレのお土産だよ。

ゲルダ ぢや御馳走になるわ。(帽子を脱ぎ、來て坐る)

(兩人食べる。)

(ゲルダは頻りと食べる。)

ロツテ 近頃はやつぱりあすこの寄席カバレかい？

ゲルダ いゝえあそこ、娘ボクシングを止められてから、さつぱり客足が減つて了つて、もう駄目なのよ。

ロツテ 何處？ そいぢや。

ゲルダ 何處つて、近頃は定めなしよ。ロココへ行つたり、黒猫へ行つたり。……でもやつぱりフリードリツヒの近所。クルフユールステンダムの成金街は、やつぱり厭やね。

ロツテ 相變らずやつぱりが出るのね。

ゲルダ (笑ふ)

(間。)

ロツテ (ゲルダの口癖に昔を想ひ出して、獨り言のやうに) やつぱりか。

ゲルダ それからあたいカイザー・カフェへもちよいちよいち行つてよ。

ロツテ (急に熱を以つて) カイザー・カフェ?

ゲルダ さうく、姉さんはあすこでユーヂと識り合つたんだわね。

ロツテ (獨りで) カイザー・カフェー。

ゲルダ あたいもよく一緒に招んで貰つたつけ。あたい、あの晩の事よく覚えてるわよ。姉さんが育児院にゐるフリツツの話をして泣いたあの晩の事。ユーヂも泣いたわね。あの人はほんとに優しい方ね。

ロツテ (ぼんやり獨り言のやうに、小聲で) カイザー・カフェ! (ゲルダに) ほんとにさうだつけね。あたい、生れて初めてだよ。お客に身の上話なんかしたの、だつてユーヂがあたいに初めて、ほんとの人間を見せてくれた人なんだもの。

ゲルダ 冬の晩だわ。雪が降つてたわね。

ロツテ あたいあの人初めてお説教した時ね、こんな顔して(ユーヂの聲色で)『ねえ、ロツテ! よく考へてごらん。こんな生活が人間の生活かい。お前は考へるつて事を知らないのかい。』なーんて初めた時、ほんとに心の中で笑つてやつたんだよ。なんてお坊つちやんなんだらう。良い鴨だつて、あたいはさう思つて、随分徒費ひをさせてやつたんだよ。その内に、あたいにはなんだかあの人恐くなり出してね。あの方は皆んな知つてゐるんだ。何もかもちやんと知つてるんだ。そして態とあんな馬鹿なお金を費つてるんだつてね。そんな氣がし出したのさ。

ゲルダ あの人ほんとうに心の正しい方なんだわ。

ロツテ それにあの晩、あの人が眞面目な顔をして、あたいを救つてやると云ひ出した時、あた

い妙にかう氣が弱くなつちまつてね、そいであんな身の上話なんかして了つたのさ。

ゲルグ でも良かったわ。あれで姉さんの運が向いたんだもの。

ロツテ そしたらあの方はすぐその翌る日、育兒院へ行つてフリッツを出して来てくれたんだわ。

あたい、あの人が、良いもんを見せてやると云つて、あの部屋の中から、フリッツを呼び出してくれた日の事を思ふと妙にかう胸が詰つて、……（泣く）

ゲルダ 姉さん！

ロツテ （まだ泣いてゐる）

ゲルダ 姉さん！ ロツテの姉さん。

ロツテ いゝんだよ。（笑ふ）あの時フリッツは空色の水兵服を着てゐたつけ。あたいの所へ飛ん

で来て、ママ―つて、あの香水の瓶のやうな可愛い手を擴げて、いきなり抱きついてさ、さうしてあたいの頬つぺたへ、チュツとキツスをしたんだよ。

ゲルダ 姉さん、お茶をもう一杯貰ふよ。（注ぐ）

（鳩時計六つなる。）

（戸外には黄昏が靜かに迫る。）

ロツテ どうしたんだらうね。

(隣りの家から又ピアノが聞えて来る。「ポンパドール」。)

ゲルダ お隣りの家一體なに？

ロツテ ユダヤ人よ。毎日、あゝやつちや大勢の人をよんで来て、ダンスやつたりなんかしてるのよ。うるさいつたらありやしない。

ゲルダ のんきね。こんなに不景氣だつて云ふのに。

ロツテ あゝ云ふ連中は、マークが下れば下つたで、又それを利用して儲けるんだからね。それでゐて、エレベーターの代も拂はないんだつてさ。この三階迄皆んな歩いて来るのよ、あすこの家の人つたら。

ゲルダ 姉さんとはエレベーターがあるからいゝわね。

(間。)

ロツテ あのカイザー・カフェの色男のヴァイオリン弾きね。あの男まだゐて？

ゲルダ 誰あれ？ ヘルマン？ あの男なら、ほら、波蘭から来た、タランチュラ、タランチュラ  
つてみんなが呼んでゐた女ね、あれと二人で、とつくの昔ずるとくじを極めこんぢやつ  
たのよ。今のはお禿のユダヤ人。

ロツテ 今何が流行つてるの？ やつぱりあれ？ (隣りの音楽を指す) ポンパドール？  
ゲルダ あゝ、まだ良くやるよ。

(身體を揺すつて唱ふ。)

Joseph ! Ach, Joseph !

Was bist du so keusch ?

.....

ロツテ (暫く聞いてゐる。いきなり) 止して。止して。

(急にヒステリカルに泣き出す)

ゲルダ (びつくりして止める) どうしたのよ。え？ 急に。  
ロツテ (猶泣いてゐる)

ゲルダ え？ ロツテ！

ロツテ (急に泣き止む。今度は笑ふ) あたいつてどうしてこんなにお馬鹿さんならうね。

氣が變なんだよ。ね、氣に掛けないでくれ。……かうやって、久し振りであんたに會つて、その唄を聞いてゐたら、急にあの頃の事を想ひ出しちやつたの。ほら、よく三日も何んにも食べないで、あの裏の四階の一部屋に、石炭のない冬の晩、あんたと二人で抱き合つてさ、ぼろ蒲團にくるまつてゐた頃、きつとあたいの耳にはその節がこびりついてゐたんだものね。

ゲルダ (今度はゲルダがふさいで来る)

ロツテ あゝ厭や〜。あたいたの頃の事を振り返つて見ると、もう目の前がばうつと灰色に霞んで了ふんだよ。あんな生活はもう死んでも厭や。

(となりのピアノ止む。)

(眞剣に)ほんとに今度、あのユーヂに捨てられたら、あたいは、あたいはきつとスプレーのお濠へ飛びこんで死んで了ふよ。

(間。)

(思ひなほして) 忘れるんだわ。忘れるんだわ。先きの事だけ考へるんだわ。

ゲルダ  
ロツテ姉さんは幸福だわね。先きの事を考へられるんだもの。あたいなんで、どつち向いたつて眞暗だ。

ロツテ  
(氣が着いて) そんな事ないよ。

ゲルダ  
いゝえ、いゝえ、駄目々々。……だからあたいはずうつと昔の事を考へるの。まだリユーベツクのお父さんの家にゐた頃の事。あの頃は、あたかも無邪氣だったわ。この世界が光で溢れてゐたわ。……(ふとトランクに目をやる。走つて行く) あら、リユーベツクのもの？ あすこのホテルのだわね。行つたの？

ロツテ  
(見て) どれ？ それ？ あゝ。去年の夏、オストゼーの海岸へ三人で行つたんだよ。

ゲルダ  
(懐しさうに考へてゐる。やがて首を振つて) もう止めよう。こんな事考へた後の淋しさつたら。無理酒飲まされた後の酔ひ醒めのやうな、頼りない氣がするわ。悲しさが二倍にもなつてくるんだもの。……あたかも、姉さんみたいに、せめて子供でもあつたらね。

ロツテ  
(優しく) 何云つてるの？ あんたのは求めるのよ、苦勞を。ゲルダはまだ若いんぢやないか？

ゲルダ  
(首を振る) いゝえ、もう駄目よ。

(間)

戦争のお蔭でこの國には女が多過るんだわね。

ロツテ それよか。あんた、タイプライター習はない？　すぐ上手くなつてよ。あたいもう随分うてるんだよ。

ゲルダ (氣のなさうに) タイプライター？

ロツテ あゝ。

ゲルダ ピアノとどつちがむづかしくつて？

ロツテ そりやピアノよかずつとやさしいさ。

ゲルダ さう？…でも駄目だわ。タイプライターが上手くなる頃には、あたい干乾しになつて了ふから。(淋しく笑ふ)

ロツテ そんな事あるもんか。そのうちに良い旦那がつくよ。

ゲルダ (ゆつくりと) もう澤山。そんな、氣休めは。後から空いたのが参りますつて、車掌に云はれるやうなもんよ。(急に早くべらくと) そりやね。獨逸人なら、ない事はないわ。だけど獨逸人なんかと一緒になつて、こんなマークのどんく下つて行く國にくすぶつ

てゐるなんて、考へる丈だつて心細いわ。だからあたいたい外國人でさへあつたら、誰とも一緒になる事よ。あたいたい、とにかく、外國へ行きたいのよ。(又ゆつくりと)男より女の方がずうつと少い國へ。(間)ロツテ姉さんはうまくやったわね。(獨り言のやうに)あんな良い旦那なんて、活動のエキストラみたいにな、さうたんとあるもんぢやないわ。

ロツテ 誰の事? ユーヂ?

ゲルダ えゝ、さうよ。

ロツテ (ふざけて)ゲルダはさつきから随分賞めるのね。あんだユーヂ好き?

ゲルダ (何の氣なしに)えゝ、好きだわ。

ロツテ (急に眞剣に、鋭く)ゲルダはいくつ?

ゲルダ あたし?…(氣が着いて)何云つてるの? そんな事訊きいて。…でも、時々撲つたりする?

ロツテ ユーヂ? いゝえ、そんな事はしないよ。

ゲルダ たまには撲たれて見たいやうな氣になりはしない?

ロツテ お馬鹿ね、あんたは。それは戀人同志のうちの事だよ。夫婦になつてから撲つたりするやうな、そんな亂暴な男あたいたいは嫌ひ。

ゲルダ 夫婦だつておなじだわ。

ロツテ いゝえ。違ふんだよ。夫婦つてもんは毎日顔を見合せるもんだらう? 毎日撲たれてゐ

るなんて、そんなおたまりこぶしがあるもんか。

ゲルダ さうか知ら？

ロツテ さうか知らつて、當り前だわ。第一痛いぢやないか。

ゲルダ そりやさうね。

ロツテ (ふざけて、からかふやうに) ゲルダは撲たれて嬉しい人があるんだらう？

ゲルダ (ふざけて) お生憎さま。(急に眞剣に、投げやりに) 撲たれる人もなけりや、キツスされる人もありやしない。そんなものがある位なら、あたいこんなにお腹が空いてなんかあやしないわ。あゝあ。……もう考へないわ。それよかこの腸詰でも食べた方が餘つ程お腹なかが張るわ。(食べる) ……さうして寝るんだわ。

(開。)

(腕を搔き乍ら) 南京蟲のぬない新しい布敷シーツの寢臺ベットの上で、思ひ切つて寝て見たいわ。

(サンタマリヤの鐘の音。)

ゲルダ どのの？

ロツテ ルーテル教會。——もう良い。

ゲルダ え、御馳走さま。

(ロツテ食卓の上を片付け始める。)

(ゲルダは鐘の音に吸はれるやうに窓邊へ行き、そのまゝ聞き入つてゐる。)

ゲルダ (突然振返つて) ロツテ! あんただけは、あたいの事、時々想ひ出しておくれ、ね?

ロツテ 何云つてるの?

(やゝ長き間。)

ゲルダ あたい、もう行くわ。

ロツテ 良いぢやないか。もうちよつと。

ゲルダ だつて、もしかすると晩めしのお客があるかも知れないわ。

ロツテ さう? ぢや、ちつと待つてゐない? あたい、その角のお菓子屋で、チョコレート  
を少し買つて来て上げるから。

ゲルダ 良いのよ、そんな事しなくたつて。

ロツテ いったつたか、あたいが病氣で二週間も床に就いてた時、毎日あたいにパンを食べさせてくれたあの頃のお禮よ。

(ロツテ右隣の部屋へ皿を運び、やがて外套と帽子を冠つて出て来る。)

(ゲルダは戸外を見てゐる。)

(もうすっかり薄暗くなつてゐる。向ひの窓に燈火が入つて、街燈の光が、青く並木の菩提樹を下から照らす。)

ロツテ ぢや、ちよつと待つててね。家が空くから。それに、もう追つつけユーヂも歸つて来るよ。

ゲルダ えゝ。

ロツテ (行きかける)

ゲルダ (小聲で) ロツテ!

ロツテ え?

ゲルダ ねえ、ちよつと。

ロツテ (立止つて) なあに?

ゲルダ あのね。

ロツテ あゝ。

ゲルダ あの、……

ロツテ (気がつく) あゝさう。どの位？

ゲルダ コーヒー代だけで良いのよ。

ロツテ さう？ ぢやこれ丈上げとくわ。(金を渡す)

ゲルダ ご免なさい。こんな積りで来たんぢやないんだけど。

ロツテ いゝんだよ。

ゲルダ (裾をまくつて、靴下の中に金をしまふ) 近頃はどこのカフェでも掛けぢやくれないのよ。お客がないと、自分でコーヒー代を拂ふの。

ロツテ まあ、さう？

ゲルダ ユーヂが歸って来ると云ひ悪いから、……ほんとにご免なさい。

ロツテ いゝんだよ。そんな事遠慮しなくたって。

(自分の脱いだスエーターをゲルダに着せる。)

寒いだらう？

ゲルダ 有難う。

ロツテ (左手の戸口に行き乍ら) 電燈あかりつけると良いよ。

ゲルダ いゝえ、まだ良いわ。

ロツテ さう? (去る)

## 第二景

ゲルダ (戸外を見下し乍ら、半分ロツテに、半分獨り言) もう日が暮れちまったのね。……街燈が点いてるわ。

(左の部屋で鍵の音。)

(昇降機リフトの音。)

(舞臺暗くなつてゐる。)

(ゲルダは椅子を露臺に出して、ぼんやり戸外の街を見てゐる。どこからともなく、物乞ひの手廻しオルガンがソルベーチの唄を弾いて通る。)

ゲルダ (合はせて鼻聲で唱ふ)

(オルガンの音消えて行く。)

(ゲルダ首を振る。)

ゲルダ あのお爺さんの手廻しオルガンときたら、…… (軽く歎歎く)

(馬の蹄、鞭の音。)

(やゝ長き間。)

(再び昇降機リフトの音。)

### 第三景

(左の隣室から子供の聲で『桃から生れた桃太郎』の唄聞ゆ。)

(鍵の音。)

槓の聲 (隣りの部屋で) さあ、お自家うちだよ。

(隣室に燈火点く。合ひの曇硝子が光る。)

槇の聲 今日には良うあんよしたね。

フリッツの聲 眠いよう。

槇の聲 さあ早くママに只今をするんですよ。お土産みやを持って。

フリッツ (桃太郎を唱ひ乍ら入つて来る。六つ位の男の子) 暗いなあ。ママー!

槇 (入つて来る) ロツテ! (壁のスキツチを捻る。天井の裝飾燈カンドリエ点く。露臺バルコンの人影を見て) ロツテ! どうしたんだね。燈火あかりも点けないで。

フリッツ ママー! (走つて行く)

ゲルダ (立上つて振向く。涙をかくす)

フリッツ (怪訝な顔をして立止る)

槇 おや!

ゲルダ 今晚は! ヘル・マキ!

槇 今晚は! どなた?

ゲルダ 私よ。ゲルダよ。(手を出す)

槇 あゝ、さうか。(握手する) ……よく来てくれたね。ロツテは?

(買物などを置く。)

(鈴蘭の花束を解いて、ピアノの上の花瓶にさす。)

ゲルダ まあ！ (笑ふ) 今しがた迄居たのよ。お會ひにならなかつたの？

槇 いゝや。

ゲルダ 今その角のお菓子屋へチョコレートを買ひに行つたの。

槇 あゝさうか。ぢや入れ違ひだ。僕達はバイエリツシエ廣場の方から來たから。公園でちよつと子供のお相手。ハ、ハ。

フリッツ (土産の菓子包みを椅子の上に置いて、ポカンとゲルダを見てゐる)

ゲルダ フリッツヒエン！ 小母さんを忘れたの？

フリッツ (首を振る)

槇 御挨拶は？ ゲルダの小母さんですよ。ママのお友達。

フリッツ (半分氣が着いたやうに、半分解らないやうに) アーベント、タンテ！ (キツスをする)

槇 そこは寒かない？ こつちへ入ると良い。

ゲルダ いゝえ。夕方の空氣はほんとにせいゝ致しますわ。

(硝子戸を閉めて、序に窓のカーテンを引いて、中へ來る。)

(スエーターを脱いで、ソファに腰を下ろす。)

榎 どうかしたの？

ゲルダ いゝえ。

榎 だつて眼が光つてゐる。

ゲルダ (目を伏せる。微笑む) 癖なのよ。

榎 そんなら良いけど。

ゲルダ 今、ロツテといろく昔話をしたもんですから。それに、かうやつて、ぼんやり夜の街を見下してゐると、妙に悲しくなつて了つてね。

フリッツ (ピアノの蓋を開ける。『桃太郎』を弾かうとする)

榎 フリッツ！ 今はいけません。お客様だから。

ゲルダ いゝえ、構はないのよ、

榎 あつちのお部屋へ行つてらつしやい。着物を着替へるんですよ。ママのゐない時は獨りでするんでしたね。

フリッツ (ピアノの蓋を開けつ放しにして、しぶく立上る)

ゲルダ いゝお子ね。あゝ、さうく、あたし忘れてゐた。(手提袋から紙に包んだものを出して) ほら郵便切手。(開けて見せ乍ら) これはダンチツヒのよ。それからこれはアメリカ。：

榎 　　：

榎 　　いゝね。

フリツツ 有難ダンゲう。（切手を貰つて、お辭儀をして右の部屋に去る）

### 第四景

榎 　　（紙包みの一つを解いて）どう？

ゲルダ えゝ、有難う。

榎 　　さあ。

ゲルダ えゝ。（取つて食べる）

榎 　　時々、ロツテがお前さんの話をしますよ。

ゲルダ さう？

榎 　　僕も時々心掛けてはゐるんだけど。

（ポケットからタ刊を出す。）

弗が二萬一千か。

ゲルダ え？ 二萬！ まあ——！

楨 (夕刊を置く) 不景氣な事だらけだ。

ゲルダ 又コーヒー代が上るわね。

楨 さうく、茶でも入れよう？

ゲルダ いゝえ、今御馳走になつたばかりなの。

楨 さう？……早く歸つて來ないかな。フリッツが眠たがつてゐるのに。……あゝ、ゲルダ！

それ迄ダンスでもやらないか？

ゲルダ えゝ、(笑つて) フリッツのピアノを追拂つて、大人が騒ぐのね。

楨 ハハゝゝゝ。

(蓄音機に盤をかける。)

ジンミー。

ゲルダ (立上る。着物をなほす)

(蓄音機鳴る。)

"In Berlin an der Ecke von der Kaiserallee,....."

槇 (態と丁寧にお辭儀をして) Bitte, Fräulein! darfich mal?

ゲルダ (ロココ風のお辭儀をして) Sehr gerne!

(兩人踊る。)

フリッツの聲 (隣室から) パパー!

槇 (踊り乍ら戸口へ行って) おとなしくしてるんですよ。もうすぐママが歸つて來ますから。それ迄、こつちへ來ちやいけませんよ。

(兩人時々唱ひ合せ乍ら踊る。男は活潑に女は力なく。)

ゲルダ もう止めるわ。

槇 さう? ぢや。(又丁寧にお辭儀をする。蓄音機を止める)

ゲルダ (さも草疲れたやうにソファに身を投げる) やつぱり絨氈じゅうたんの上ぢや駄目ね。

槇 調子が悪いな。

ゲルダ それに私ぢやね。(笑ふ)

槓 近頃ちつともやらないもんだから、足が云ふ事をきかない。

ゲルダ ロツテと踊らないの？

槓 とてもそんな元氣はないさ。毎日顔を合せてゐる女と踊つたつて始まらない。夫婦なんてもものは熱情つてもんが段々なくなつて行くんだからね。

ゲルダ そんな事ないわ。

槓 何か素晴らしい事件が起れば良い、なんて時々思ふ位だよ。

ゲルダ あんまり幸福過ぎるからよ。

槓 (菓子を頬張る、又ちよつと新聞を取上げて、その日附を見て、急に何か考へつく、笑つて) さうだ。ねえ、ゲルダ！ 面白い事があるよ。

ゲルダ なーに？

槓 一口乗つてくれないか？

ゲルダ 何？ 今話した素晴らしい事件？

槓 二人でちよつと狂言をするんだ。

ゲルダ え？

槓 (新聞の日附けを示し) 今日は、ほら、ね。

ゲルダ (うなづく)

槓 ロツテをちよつとかついでやるのさ。

ゲルダ ロツテを？

槇 あゝ。

ゲルダ どうするのよ？

槇 もうぢきロツテが歸つて来るだらう。だからこゝで二人でちよつと狂言をして、いちや  
ついでに見せてやるのさ。

ゲルダ 駄目よ、そんなこと。

槇 ロツテの奴きつと嫉くよ。

ゲルダ 當り前だわ。駄目よ、そんな事。

槇 構はないよ。その位の事でもなくちや、夫婦なんて實際詰らないもんだよ。

ゲルダ だつて、ロツテがほんとに怒つちまつたらどうするの？

槇 そんなこたない。あいつは、俺がどんなにあいつを愛してゐるか、ちやんと知つてゐる  
んだから、……でも少しは嫉くよ、きつと、狐色位に。

ゲルダ そこで貧乏籤引くのは私だけなんでせう。眞平だわ。お斷り。

槇 ねえ、ゲルダ！ 頼むから手傳つておくれ。ね？

ゲルダ 大丈夫？

槇 俺が引受けるよ。

ゲルダ ぢやどうするの？

榎 (ちよつと考へる) 先づかうするのさ、(電燈を消して) ゲルダ! お前上衣をお脱ぎ。

ゲルダ 上衣?

榎 (今度は机の上の置ランプを点ける。机の上と、その傍の長椅子を赤く照らし出す) お前は私の云ふ通りにすればいゝんだよ。

ゲルダ (上衣を脱ぐ)

榎 それからシャツも。

ゲルダ (シャツも脱ぐ)

榎 靴。

ゲルダ (靴を脱ぎかけて、靴下の穴に気がつき、あわてゝそれをかくすやうに、又穿く) 嫌や、嫌や、靴だけは嫌や。

榎 どうして?

ゲルダ どうしてぐも。

榎 ぢやいゝや。

(その時、昇降機リフトの音。)

ゲルダ エレベーターよ。

榎 歸つて來た。さあ、早く早く。

(兩人抱き合つて、長椅子に腰を下す。左の戸口を見ないやうな位置に、暫くさうしてゐる。)

(鍵の音。)

## 第五景

(やがて左の戸開く。)

ロツテ (入つて來る) 待つた? (帽子を脱いで、紙包を卓上に置き兩人に氣が着く。そのまゝ、ちよつと立止り、そつと又引込む)

(榎とゲルダの兩人は横目で見て、笑ひをこらす。)

榎 (耳語く) もういゝよ。

(兩人立上る。)

(間。)

ロツテの聲 (隣りの部屋から、やゝ震へて) 只今!

槓 (耳語く) 早くお着。(隣りへ) ロツテかい?

(ゲルダ着物を着る。)

ロツテ (戸を開けて入つて來る。黙つて椅子に坐る)

ゲルダ (極り惡るさうにして、槓を見る)

槓 (笑ひをこらしてゐる)

(間。)

ゲルダ (堪へられなくなつて) あたし、もう歸るわ。

ロツテ (黙つてゐる)

槓 まだいゝぢやないか。ロツテも歸つて來たし。(ゲルダと目配せして笑ふけれど、ゲルダ

は眞面目に困つて了つてゐる)

ゲルダ だつて、……

楨 まだ早いぢやないか。

ゲルダ え。

楨 ぢやもつとおいでよ。良かつたら今晚一晚遊んで行つたらい。

ゲルダ でも、…… (黙つて困つてゐる)

楨 今日はなんか御馳走して上げるよ。ね、遊んでおいでよ。

ゲルダ え。(少しためらつてゐるが、この言葉に) ぢや、お邪魔ぢやなけりや、……

楨 邪魔なもんか。(ロツテに) いゝね? ロツテ!

ロツテ (黙つてゐる)

(まづい沈黙。)

ゲルダ やつぱりあたし歸るわ。……ロツテ! さやうなら。

楨 どうして?

ゲルダ (黙つてゐる)

ロツテ (前を向いたまゝ) いゝぢやないか。

ゲルダ でも、……：歸るわ。

ロツテ さう？（立上つて、冷やかに）さやうなら。

ゲルダ （帽子を取つて行きかける）

ロツテ （鋭く）ゲルダ！

ゲルダ （立止つて）なあーに？

ロツテ そこにチョコレートを買つて來てあるわよ。

ゲルダ え、有難う。（ちよつとためらつてゐたが、やがて決心したやうに）ぢや貰つて行くことよ。さやうなら、ヘル・マキ！ さよなら、ロツテ！ また來るわ。

ロツテ （皮肉に）時々いらつしやい。月水金は、あたゐ、タイブライターを習ひに行つてますからね。（間。獨り言のやうに）南京蟲のゐない新しいシーツの寢臺ベツトの上か。（立上る。新聞を手にして読みながら、ぶらぶら歩く。無心に小聲で）『ルール地方又不穩。』……（溜息）

ゲルダ （左の部屋に去る）

槓 （追いて去る）

ロツテ （人がゐなくなると、急に新聞を置いて、ピアノの前の椅子に腰を下し、顔を埋めて、聲を出さずに、身體をゆすつて歎歎く）

ゲルダの聲 （隣室から）だから云はないこつちやないの。

槓の聲 (同様に) 大丈夫だよ、又おいで。ね？ 活動へでも行かう。……三人で。

(鍵の音。)

## 第六景

槓 (口笛を吹き乍ら入つて来る。スキツチを捻る。カンドリエつく)

ロツテ (顔を上げて、涙を急いで拭き、又もとの冷やかな表情にかへる)

槓 (部屋を横切つて、卓子の上の葉巻をとり、右手の長椅子に腰を下し、葉巻に火をつける)

(長い沈黙。)

ロツテ (指で數へ乍ら) あなたと、ゲルダと、フリツツ。……三人か。活動は何やつてるの？

槓 (ちよつと横眼を使つて、笑ひをこらへてゐる。葉巻をさも暢氣さうに吹かす) アルト・ハイデルベルヒさ。

(間。)

ロツテ 鳶毛の女と、金髪とどっちがお好き？ あなたは。

榎 さあ？ (態と大業に首を曲げて) そいつは難題だな。薔薇とチヨコレートとどっちが好きかって訊きかれるやうなもんだね。

ロツテ フオイ！ (指に唾をつけて、壁になすりつける) 金髪の女はね。憚り乍らそんな甘口には乗りませんよ。

榎 一年前の言葉が出たね。

(長い間。)

ロツテ (急に泣き出す)

榎 (立上つて、側に行く、肩に手をかける) おい！

ロツテ (ヒステリカルに突放す。激しく泣く)

榎 (少し困り始める) おい。ロツテ！

ロツテ 知らなくつてよ。知らないつ！

榎 (獨り言のやうに、その實聞えよがしに) 少し薬が利き過ぎたかな。

ロツテ 嫌ひ、嫌ひ。あつちへ行つて！

槓 困るなあ。(段々困つて来る。仕方なくその椅子に坐る)

(まづき、長き沈黙。)

ロツテ (泣き止む) あゝあ。(深い溜息をして、立上り長椅子の所に行き、黙つて傍の編物を手にする)

(間。)

ロツテ (鼻歌を唄ひ出す)

槓 おい、ロツテ！

ロツテ (冷やかに) 何か御用？

槓 まだ怒つてゐるのかい？

ロツテ いゝえ。(自嘲的に笑つて) あたし、初めから怒つてなんか居ませんわ。

槓 いゝや怒つてゐる。

ロツテ 怒つてませんたら。

槓 怒ってるから、怒っていると云ふんだ。

ロツテ だから怒ってないから怒ってないって云ってるのよ。

(間。)

ロツテ (編物を持ったまゝ立上る。溜息。バルコンに出る。獨り言のやうに) 夜だわ。あすこらあたりの明るい空が、ポツツダムの廣場か知ら。あの下に人々はひしめき合ひ、抱き合つてゐるのだわ。それなのに、あのお月様の冷つめたい事。

(間。)

ワンダーフォーゲルの人達が通るわ。渡り鳥が。女學生も混つてゐるわ。マーガレットの髪に結つて。……

(春の通りをワンダーフォーゲルの群が通るらしく、ギターの音に合はせて、『菩提樹』の唄を歌つて行く。)

ロツテ あたしだつて昔はあんな時があつたんだわ。

(ワンダーフォーゲルの唄、段々消えて行く。)

(ロツテきゝ入つてゐる。)

(やがて、振返る。)

ロツテ お化け！ (變な恰好をする)

槇 (びつくりして振返る) 何んだ？

ロツテ ホホ、、、、、。(急に陽氣に笑ひこける) 驚いた？ ホ、、、、。

槇 (今度は槇が眞面目になり出す)

ロツテ (急に笑ひ止む) ねえ、へール・マキ！

槇 馬鹿！ 何んだい？ 改まつてへールだなんて。

ロツテ あのね？

槇 あゝ。

ロツテ あたし、今日おもてゝ面白い事聞いたんだけど、ほんとか知ら？

槇 何んの事だよ？

ロツテ 二つのものが高い所から落つこちると、大きさを重さにかゝはらず、おんなじに落つこ

ちるんですつて。

槇 馬鹿だな。

ロツテ 嘘？

槇 そりや、真空の中の事さ。

ロツテ いゝえ、空中でもおんなじですつて。

槇 馬鹿云へ。空気には抵抗つてもんがあるんだよ。

ロツテ いゝえ、あたしはちゃんとした人から聞いたんですからね。

槇 そんなら、試して見るがいゝ。

ロツテ えゝ。……試して見るわ。(獨り言のやうに小聲で) 試して見るわ。

(間。)

(隣りの家から、ピアノの音が無關心に漏れて来る。又『ボンパドール』の曲である。)

(會話の時は靜かに)

槇 又始めたな。まるで世界にあの曲一つしかないやうだ。

ロツテ (黙つてゐる)

(間。)

ロツテ ヘール・マキ!

榎 又か。止せよ。

ロツテ 見て、頂戴。(編物を取上げ、毛系の玉だけ切り)この毛系の玉と、それからね、……(バルコンの欄干に足をかける)

榎 (段々、ロツテの様子の変なのに、気がつく。あわて、立上る)

ロツテ それから私のからだ、……

榎 (急に不吉な豫感に捉へられて、いきなりバルコンに飛んで行く。兩人の姿カアテンの向うにかくれる)

(ほんの瞬間不安な静寂。)

(バルコンのカアテンのかげから急に陽氣な笑聲が聞えて来る。)

ロツテ (榎と抱き合ふやうにして出て来る)

榎 (息をはずませてゐる)何んだ、お前。

ロツテ (笑ひ乍ら)驚いた?

楨　驚いたよ。(力なくその椅子に腰を下す)

(短き間。)

## 第七景

フリッツの聲　(右の隣の部屋から) パパ！　開けてもいい？　(『ポンパドール』を口笛吹き

乍ら入つて来る。ロツテを見つけて) ママ！　いつ歸つて来たの？

ロツテ　今。

フリッツ　僕ちつとも知らなかつた。(ロツテの方へ寄つて行く)

ロツテ　(フリッツの頭をさすり乍ら) ママはね、そのバルコンから這ひ上つて来たの。今ね、  
パパがこの坊やの毛系の紐で、(手にしてゐた毛糸を示し、眞剣な顔付きで) ママを引き  
上げてくれたの。

フリッツ　嘘云つてらあ。(離れて) 四月お朔日ついたちか、つが、れる奴アばーか。(ふと壁の曆を見る。大業  
に) ドンナウエツタ！　パパは無精だな。(椅子を壁に寄せて、その上に乗し、曆を剥す)  
卅、卅一、卅二、(下へ飛び下りて) ぢやなかつた。今日は四月のお朔日よ。

ロツテ　(楨に) 馬鹿ね、あんたは。

フリッツ この紙頂戴ね。僕、鶴折るんだから。

ロツテ (いきなり夫の首に手を廻して) さあ、踊りませうよ。

槇 (元氣なく立上つて) あゝ、踊らう。

(隣りの音楽が無關心に、陽氣な舞踏曲を奏し續けてゐる。)

(兩人踊る。)

フリッツ (隅のソファに、觀客の方を向き乍ら坐り、無心に一心に鶴を折つてゐる。)

(そのフリッツの無邪氣な姿にスポットを殘し、舞臺を段々暗く絞る。)

——靜かに幕——

底本 タイトル 現代日本戯曲選集 第5巻

著者 伊藤整 等編

出版者 白水社

出版年月日 1955